

## 伊東静雄について

岩 田 久 美 子

孤高な高踏的詩人と自らを批評しつつ独自の詩的世界を確立した伊東静雄は、近代詩壇に大きな一つの指針を残して昭和二十八年その詩的生涯を閉じた。四冊の詩集『わがひとに与ふる哀歌』、『夏花』、『春のいそぎ』、『反響』に彼の心を托して。

伊東静雄は処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』以来、彼独自の高潔な詩風で当時の詩壇に注目された。「彼の詩を支えたものは、決して言葉ではなく、つねに独自の強烈な精神であつた。」（『伊東静雄詩集』創元社・解説桑原武夫）という言葉は、伊東静雄の詩の特色のすべてを語っている。

私が初めて彼の詩に親しみ、接した時、その息苦しい、救いのない孤独感に言い知れぬものを感じた。それは我々人間が生を受けた瞬間から背負わなければならない宿命故であるうか。何ゆえ、彼はかくも息苦しく表現しなければならなかったのか。その実体を確かめるため、彼の詩風に触れ、彼の詩人としての背景に照明をあて、生活環境や時代環境が作品に与えた影響を探ると共に、彼の性格判断に必要な書簡・日

記を通して内面的世界の正直な吹き目を向け、繊細で傷つき易い一詩人の苦悩にスポットをあてて、彼の人間像を描いてみたい。

伊東は、その詩人的出発期において一人の女性とその家族（酒井家——彼が佐賀高等学校在学中に、英文学を教授していた酒井小太郎氏が彼と同郷の諫早出身であつたため、彼が京都大学在学中には姫路にいた小太郎氏の家を度々訪問し、令嬢の安代、百合子さんと親しくなる）を識り、彼らとの接触により、目頃沈み勝ちな伊東の心は癒されていった。自分の境遇のみじめさに悲観的状态だつたが、酒井家の雰囲気「生活のオアシス」（大正十五年九月八日、酒井安代、百合子宛書簡）を感じ、ひとときの憩いの時間をもつた。そして、小太郎氏の令嬢百合子さんに彼の若い魂は魅せられる。しかし、この愛の芽は伸びないで切りとられ、それ故、彼自身の内に沈めた苦しいものになつた。唯一つの恋は告白という形をとることなく、彼の深部にとどまつた。

こんな風に、自分で自分の手足をちぢめて、からんでう

もこもる様に、ひつこんであるのを腑甲斐ないとも思ひますけれど、どうにも仕方ありません。もうしばらくしたら、私も、もつと、はつきりした男になれるだらうと思つて、それを待つてゐます。(大正十五年五月・酒井安代宛書簡)

この手紙からは、愛を打ち明けられず低迷している姿がうかがわれる。この頃の彼は、しきりに淋しいと友人に洩らしている。そして親しい友人には百合子さんへの思慕ゆえの悩みを偽りなく伝えていたのではないかと思う。その証拠として、

帰つてからまだ京都にはゆきません。ゆり子さんもいや。(昭和四年八月二十九日・宮本新治宛書簡)

京都の娘さんは相変らず。人生のなんとわずらわしきかなですな。(昭和五年三月二日・宮本新治宛書簡)

というように、この手紙からは簡単な言葉の裏に秘められている彼のやりきれない悲痛な、救いようのない声を聞くのである。処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』が「残忍な恋愛詩」(『コギト』昭和十一年一月号所載「わがひとに与ふる哀歌」萩原朔太郎)だといわれる理由は、百合子さんへの悲痛な想いに、その根本的動機はある。

冷めたい場所

私が愛し

そのため私につらいひとに

太陽が幸福にする

未知の野の彼方を信ぜしめよ

そして

真白い花を私の憩ひに咲かしめよ

昔のひとの堪へ難く

望郷の歌であゆみすぎた

荒々しい冷めたいこの岩石の

場所にこそ

これは残酷な愛の詩である。なぜならこの詩からは限りない恋の陶醉は匂つてこず、恋に泣く悲しみも伝わつてこない。ただあるのは悲痛さのみが鮮烈に響いてきて、切迫した青年の魂が、いつも冷たい孤独の場所で考えている姿だけである。「荒々しい冷めたい岩石」の厳しい条件下におかれてもなお「真白い花を咲かしめよ」と叫んでいる彼の純粋な思慕に青年の清純な姿がみられる。伊東の詩は心の状態を素直に発散させるのではなく、心の状態は一瞬の精神的時間を通して初めて登場する、余裕のある発想法である。

自分は何か風景なり絵画なりに感動する、実に美しいと思う。すると、これはどうして美しいのか、またはどうして美しいと感動するのかと自分を探る。するときつと

それが判る。それを書くんです。〔コギト〕昭和十年

一月号所載「感想」中島栄次郎

とそのような意味のことを伊東静雄が洩らしたと中島栄次郎は書いているが、この言葉に彼の詩精神の特色がみられる。

自然の姿そのものに歌う価値を見出さないで、自然の姿を彼の心のなかで濾過し、その中に魂を投入することによって激しく詩作する。彼は、虚飾のない直情的表現を信条とする抒情詩を拒絶することによって、新しい抒情詩を創出した。ここに伊東の詩の特色があり、価値がある。また、彼の詩には逆説的肯定の方法が好んでつかわれている。

伊東の内発的な発想は、それを阻止し圧殺しようとする否定面を、意識的に逆用することによって、かえってその強烈さを印象づけるのに役立たせた。〔日本浪漫派の運動〕三枝康高著・現代社

と述べられているように、逆説的抒情の方法は、壮烈なる意志の決断を表わすレトリックとして使用されている。それ故、伊東の詩には我々の魂の深部に浸透してくる切迫した何かがある。こういう方法は失敗すると観念的になるおそれもあるが、彼の場合は、独自の強烈な思想が全体を支え、その作品をまとめ上げているといえよう。

処女詩集において早くも孤独なものさびしい詩を作った彼は、

実生活の上では、非常に危険な時期であつたような気が

する。詩と同じ程度に、いつもその頃は故知らず激しいて、家の中に居ても、並外れた言動をしていた。

〔コギト〕昭和十五年五月号所載「夏花」

と當時を述懐しているが「並外れた言動」の中に彼のやりきれない感情が汲みとられる。当時の社会情勢は暗く、繊細な一詩人には時代の懷疑と不安に悩まされつつ、なお生きなければならぬという絶望感が襲った。そして、常に孤独を意識した。

こんなに孤独でありますと、周囲のことも皆単純にみえて熱中する気もおこらず、それが又、私を孤独にするのでありませう。(昭和六年十一月十六日・酒井ゆり子宛書簡)

彼は自分を孤独的人物に設定している故、彼の孤独には救いのない、絶望感がある。孤独的ムードではなく、宿命的孤独である。それは「太陽が孤独であるような、そんな孤独」〔文芸文化〕昭和十五年六月号所載「伊東さんの詩」池田勉)であり、生が続く限り、永遠に継続する孤独である。

訴えるような詩が次々と織りだされ、処女詩集の後五年間の空白があつて第二詩集『夏花』が、さらに三年の後『春のいそぎ』が刊行された。

覚悟が激しくなると、さうさう安易に物書くことが出来にくくなります。(昭和十一年十二月・酒井ゆり子宛書簡)

詩はこの頃あまり書けません。段々むずかしいことがわかつて来て閉口するのです。(昭和十二年十二月二日・酒井ゆり子宛書簡)

処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』で詩壇の注目を浴びた彼は、その後「覚悟」して詩作しようと決心したが、悩みも多かった。

自分の詩の発想法はゆきづまっていた。いや、ゆきづまっていたといふより、ゆきづまっていたところからやつとしばり出されるやうな詩である。(昭和十四年九月一日・日記)

と述べているように、この頃から発想法は行きづまり、以前のような魂の鮮烈な詩風はだんだん影をうすくしつつあった。この頃の彼は、

近頃は私は半歳の疲労が一時に出て、まるで阿呆のやうな頭になつてゐます。(昭和十一年八月二日・酒井百合子宛書簡) 近頃生活感情が切実になればなるほど詩のかけないやうになりますのはいかがなわけですね。(昭和十一年三月十三日・富士正晴宛書簡)

といつているように、元来あまり健康に恵まれていないことに加えて、家庭内の事情や、精神状態の不均衡から詩作することすら拒絶したと思つてゐた。彼には何よりも精神の疲労を回復させることが先決問題であつた。今ここで彼の心の眩きである日記に眼を向けてみよう。

ドイツとポーランド国境にて激戦中との号外あり、自分の頭脳では果して戦争に堪へるだらうか、二、三日前から自分はしきりにそれをあやふんでいる。

頭重く、いんうつ也、夏の疲労もつて甚しい感がする。朝校庭で分列式ながめながら、思索ばかりで行動なきものは発狂す、といふ言葉をつぶやいてゐた。この疲労はどうにかしなければいかん。(昭和十四年九月一日)

第二次大戦触発の危機を鋭敏に感じとり、「思索ばかりで行動なきものは発狂す」という詩人にとつては致命的時代を忍耐深く生き続けねばならなかつた。時代の不安が与える痕跡は肉体の深部までを貪り、遂には「身体の疲労は堪へられぬ」(昭和十四年九月二日・日記)という最悪の事態に陥つた。しかし、彼は迫りくる世界動乱の靴音に発狂の不安を如実に感じとつていたからこそ、その発作の勃発を避けるため詩を書いた。そして表面は穏やかで、発想法も以前に比べて平明になるが、それだけに潜んだ痛ましさを感じる詩が作られた。それは緊迫した戦局下にあつて、傷つき易く、精神的苦痛に耐えかねてゐた彼の心が鎮静な平明な詩風へと変化していったことであらう。

このように乱代を泳ぎ抜く努力は怠らなかつた彼ではあつたが、

各自の苦しみを我慢して公の仕事をして行く、人間のい

とほしさをしみじみと感じるのです。(昭和十五年六月  
中旬・池田勉宛書簡)

といつてゐる姿に生を意識している人間の救いのない叫び声  
が聞えてくるようである。常に孤独に悩まされていた彼は家  
庭内のことにも時には悩まされた。「私は目下家の中にそれ  
はそれはいやなことがあり心身げつそりしてゐます」(昭和  
十五年六月二十一日・小高根二郎宛書簡)「家庭はいやだ。  
しかし家庭を離れてひとりで生かれる自信も又ない。」(昭  
和十四年九月一日・日記)この書簡、日記から、安息の場も  
なく、精神が放浪し、言い知れぬ苦悩が伝わってくる。そし  
て遂に、

一語一語は重く、光つてゐて、全体はさらりと淡白な、  
そんな文章書いてみたい。(昭和十八年九月二十一日・  
日記)

という切実な言葉が彼の口から出ている。

昭和二十年、第二次世界大戦が日本の惨敗に終り、友人を  
失つた彼は、すでに身も心もぐにやぐにやになつてしまつて  
いて詩作する心の余裕もなかつた。しかし田舎に一軒家を見  
つけて住みついた彼は、少しは心の余裕も出来、第四詩集  
『反響』が刊行された。

#### 夏の終り

夜来の颱風にひとりはぐれた白い雲が

気のとほくなるほど澄みに澄んだ  
かくはしい大氣の空をながれてゆく

太陽の燃えかがやく野の景観に  
それがおほきく落す静かな翳は

……さよなら……さやうなら……  
……さよなら……さやうなら……

いちいちさう頷く眼差のやうに  
一筋ひかる街道をよこぎり

あざやかな暗緑の水田の面を移り  
ちひさく動く行人をおひ越して

しづかにしづかに村落の屋根屋根や  
樹上にかげり

……さよなら……さやうなら……  
……さよなら……さやうなら……

ずつとこの会釈をつづけながら  
やがて優しくわが視野から遠ざかる

この詩からは以前のような息苦しい姿は消され、詩人の静  
かな感慨を感じる。しかし、静かな中にもやるせない心情が  
伝わってくるのは、激しく深い思想のためであろう。そこ  
に、私は何か痛々しいものを感じる。『反響』刊行後、次の  
ような書簡を伊東は友人に送っている。

私は最近の自分の作を、初期のものの「解説」といふ風  
に考へてをります。しかし昔に帰ることは、到底無理な

やうに思はれます。あの頃のやうな、意識の暗黒部との必死な格闘は、すっかり炎を消して平明な思索に移らうとしてゐるやうに自分では考へてをります。(昭和二十三年二月十三日・桑原武夫宛書簡)

初期の激しい、身ぐるみの発想から平明な思索へと転化していつた彼の詩からは、表面の穏やかさとは相反する強い生への哀感みたくなものを感じる。彼は日頃、

発想は熱く烈しくなければなりませんが発現に於ては沈着暢達でなければいけないと思ひます。そのためには深く思つて浅く出す心組が必要かと存じます。(昭和十九年三月二十二日・田中光子宛書簡)

と力説していたが、この頃(「反響」)の作品は彼のいう「発想は熱く烈しく」表現方法は「沈着暢達」の方向へと変化していつた。

以上、伊東静雄の作品や思想について触れてきたが、いま私が思うに、彼の詩的生涯は決して恵まれていたとはいえない。常に太陽が孤独であるような孤独を感じ、それ故彼は歌わなければならなかつた。彼の宿命的な孤独があの息苦しい訴えと化し、それはデビュー当時から詩の中心となり、その生命であつた。

伊東の初期の作品は若々しく、その感情を表わす方法として逆説的肯定の抒情が使用されていたが、晩年に近づくにつれて、激しい発想よりも平明な思索の方法をとり、第四詩集

「反響」所収の「詩作の後」「路上」などを「円熟の頂点を示すもの」とする江頭彦造氏のごとき評者もあるが(三省堂刊「鑑賞と研究現代日本文学講座」参照)。私にはむしろ初期の作品にみられる傷つきながら生きていく青春性に彼の詩の価値があるように思う。彼の発想法は変化していつたが、彼の詩的態度は一貫して息苦しい表現方法をとっている。彼が詩作する上には、それ以外に方法がなかつたのである。時代が与える不安と懷疑に怯えながらも、自らと戦い、その中で詩作しようとした彼の力強い魂が息苦しい表現へとかりたてたのであらう。それ故、彼の詩は暗黒の憂愁に充ち、そこには救いのない孤独感が漂っている。何か永遠の迷いを感じするような彼の詩である。事実、彼は一生休らうことなき魂を持ち続けて、その生涯を閉じたといえよう。

#### 執筆 者 紹 介

安 田 章 生	本 学 教 授
山 根 賢 吉	本 学 講 師
原 田 芳 起	本 学 教 授
岩 田 久 美 子	本学昭和三十九年 卒業生